京三中36回卒業の同期生の会より

麓々会

三中36回　月渓　宏

私達は、平成九年の十二月の同期会から「麓々会」という奇妙な会名を名乗り始めました。

この会名の由来について、簡略に説明いたしたく筆をとりました。

由来の第一は、平成九年の京都ホテルでの会の案内状の文言に、「東山六々峰を脊にして～」と東山三十六峰に囲まれての盛会を願ったのが契機となりました。六々峰とは、6×6=36のカケ算を内に包んだシャレて、これが三十六回生に通ずるのが参会の諸兄の共鳴を得たものと推察されます。

第二は六々峰の出典についてです。江戸後期の津藩(藤堂家)文人に斎藤拙堂という名儒がおりましたが、この人の七言絶句の起承句に

「雄談千古遺蹤ヲ指シ、酒ヲ把ッテ回看ス六六峰、～」(鉄研斎存稿)

とあるのがそれです。この句は拙堂が上京したとき三本木にあった頼山陽の水西荘（すいせいそう）を訪ね喜び迎えた山陽が得意の歴史を語りながら酒を酌んでしゃべりまくっている様が生き生きと詠まれています。

拙堂は、梅花の月ヶ瀬を一躍天下の名勝にしたて上げた文章家。その「月ヶ瀬起勝」の名文は、今も大分県中津の山国川の名勝を天下の耶馬渓たらしめた山陽の名文（図巻記）と双璧をなします。

第三は、「ろくろく」を東の山々から解放し、西方の双ケ丘とも結びつける飛躍のわざです。幸い双陵は二つの丘、従って山麓も二つ、だから「麓々」、会名も麓々会！

このようにして、私達三十六回生の会の愛称は決定されることになりました。

丘にある　動員寮址に　雲白く
被災の友は　復び還らず　　松浦 弘